

つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 73号 2010.6.4 発行 社会政策研究所

=====

児童虐待はどんな傷を残すのか。虐待対応では障害者分野よりも少し進んだ児童分野の取り組み、重いテーマですがじっくり読んでください。【kobi】

産経新聞 連載記事から 【虐待はどんな傷を残すのか】2010年5月22日から28日

(1) 親から認められぬ子供 自分の価値が分からない

虐待を受けた経験を持つ南裕子さん(仮名)。こうした若い世代が把握されただけでも数十万人、社会の中で暮らしている=東京都内(写真:産経新聞)



「僕のこと、ふつうに見えますか」。長身で色白の青年は、統合失調症による精神障害者手帳を持っていた。さいたま市のカラオケ店員、山口拓也さん(19)=仮名。小学5年のときに実母(45)が再婚、継父(43)から身体的虐待を受け、市内の児童養護施設で育った。

「夕食を食べるのが遅かったので、テーブルに時計を置かれ、30分以内に食べないと殴られた。猫背や、つめをかむ癖も『直せ』といって殴られた。1発、2発ではなく、のしかかられて腕を押さえつけられ、顔だけを殴られたり、木の棒で頭を殴られたりした」

継父は「大きくなれ」といって食事を吐くまで食べさせた。食べきれず吐き出すと、吐いた物を再び食べさせられた。コンクリート製のベランダで深夜まで正座させられ、生卵5、6個の一気に飲みを強いられた。

中学1年のとき、木刀を手に追いかけられた。裸足(はだし)で外へ逃げたら偶然、家庭科の女の先生に会った。「親に裸足で走れといわれた」とごまかしたが、先生は自宅を見に来てくれ、警察を通じて児童相談所へ通報が行った。

「施設へ入ったら、不眠と幻聴が始まった。ひそひそ話が聞こえ、幻覚が見えた。情緒不安定のため県立高校を2年で中退し、定時制に入り直したけれど続かなかった。今も通院中で薬を6種類飲んでます」

「男なら捨てていた」

東京都内に住むゲームショップ店員、南裕子さん(27)=同=は男物のカーキ色のジャケットとジーンズ姿で現れた。髪は短めで化粧気もない。女性であるが、心がそうではいけないという。

幼いころ、「教育ママ」だった実母(51)から身体的、心理的虐待を受けた。習い事がうまくできないと「なぜできないの!」と叩(たた)かれ、振る舞いや言葉遣いが意に沿わないと平手打ちされた。「欧米のしつけ」と定規で手の甲を叩かれ、かっとなると包丁が飛んできた。

「口答えるとさらに叱(しか)られ、黙り込むと叱られ、泣いても叱られ、どうしていいかわからずパニックになった。いつもびくびくして、自分からは何もやらなくなった。

暗い子供というより、人形のようなだった。母は男の子がきらいだった。「あんたが女の子だから育ててるんだから」「男だったら捨てていた」と何度も聞かされた。

「男だったら捨てられる…。この恐怖は幼心にとても重たいものだった。私は『女の子』になろうと努力した。人形遊びやおままごとをやってみせ、好きではない色の洋服を着た。専門学校を出て、22歳で初めて母と離れて暮らし、解放されたと感じた。服装を自由に選ぶようになると男装を始めていたという。

「親から認められないことほど子供を苦しめることはないと思う。自分の存在価値をどこに置けばいいかわからず、自己の確立が遅れてしまう。傷は大人になっても影響が続くのです」

「いまさら何を心配」

大正大学の玉井邦夫教授(50) = 臨床心理学 = は「交通事故やいじめ、大災害などさまざまなトラウマ(心的外傷)の中でも、虐待は最も深い傷を残す」と指摘し、こう続けた。「虐待と一口に言っても身体的虐待とネグレクト(育児放棄) 心理的虐待、性的虐待では影響は異なり、一人の子供の中で複合している。回復は時間を要し、また個別性が非常に高いため一人一人に適切な対応が求められる」

児童虐待として認知される件数は年間4万件を超え、増え続けている。国の統計がある平成2～20年度の19年間の累計は31万7767件。一人の子供が何度か認知された重複もあるが、虐待経験を持つ若い世代が把握されただけでも数十万人、今も社会の中で暮らしていることになる。

精神障害に苦しむ山口さんは昨春、施設を出てアパートで独り暮らしを始めた。継父と実母は同じ埼玉県内にいる。夫に逆らえず一緒になって虐待していた母親は先週、訪ねてきて洗濯用の洗剤と現金3千円を置いていった。

「様子を見に来たのだろうか、いまさら何を心配してんのかと思った。両親に対しては『無』ですね。どーでもいいとすら感じない。まったく意識していない。たぶん死んでも何も感じないと思う」

虐待は子供にどんな「傷」を残すのか。傷を癒やすため社会にできることは何か。4月に連載した「なぜわが子を傷つけるのか」では親の視点から考えた。第2部として、今度は子供たちの側から考えてみたい。

(2) 虐待の傷跡...絵は叫ぶ「お母さん！」 確かな境遇への渴望

兵庫県尼崎市で平成13年、虐待により死亡した小学1年、勢田恭一君 = 当時(6) = が描いた海水浴の絵日記。手前に海が、奥に砂浜が描かれていた(写真:産経新聞)

傷つけられた子供の目に「虐待の風景」はどう見えていたのか。東京都江戸川区で今年1月、継父と実母から暴行を受け死亡した小学1年、岡本海渡(かいと)君 = 当時(7) = が亡くなる2カ月前に描いた絵がある。

国語の教科書の童話に添えられた母グマと2頭の子グマの写真をまねて、鉛筆で描いた。亡くなった際に開かれていた区の展覧会で優秀作に選ばれた作品だが、3頭の中で母グマだけ目がつり上がっていた。

兵庫県尼崎市で平成13年、小学1年の勢田(せた)恭一君 = 同(6) = が継父と実母の虐待により死亡し、運河に捨てられた事件。恭一君は保護された児童養護施設から一時帰宅する直前、施設で海水浴へ行った思い出を絵日記に残していた。絵は手前に海が、奥に砂浜が描かれていた。

心理療法の一つである絵画療法の専門家、吉田重人さん(65)は「子供がつり目の絵を描いたからといって、すべての親が虐待しているわけではないが」と前置きし、こう続



けた。

「クマは母性の悪い面の象徴であり、ふだんは抑えられている母親観を示している。一方、海水浴の絵は海と砂浜の位置が真逆だ。自身が海という不安定な場所において、陸に上がりたい、確かな境遇へ行きたいという願望を表している」

親に愛してほしい

絵画療法に詳しい目白大学の田中勝博教授（57）＝臨床心理学＝は「子供は言葉で表せないため、絵で示す。児童相談所で保護された子供が、自身がもう安全なのだと安心し、抑えていた感情を絵であふれさせることはよくある」とし、海渡君のクマの絵についてはこう述べた。

「クマの母子は仲よく寄り添っている。母親の愛情を求めているように見える。親に愛してほしい。それが亡くなった子供の願望だったのだろう」

親に愛されたいと思う気持ち。それは子供の本能といってもいいだろう。その思いがかなわず、逆の仕打ちを受けたとしたら...

東京都の会社員、松本めぐみさん（32）＝仮名＝は地方都市で過ごした少女時代、実母からしつけと称して日常的に身体的、心理的虐待を受けた。

何をやっても決して褒められなかった。ほうきで叩（たた）かれ、尻はあざだらけだった。

「どんなに叩かれても母からの愛情をあきらめなかった。あきらめられなかった。求めでも得られなかった愛情は、次第に色を変え黒くにじみ、心に影を落としていった」

高校時代に恋愛し、恋人に依存した。それでも満たされず、売春まがいのこともしたという。

私で終わりに

虐待された子供が親になったとき、わが子を虐待してしまう虐待の世代間伝達（世代間連鎖）。さまざまな研究から、虐待する親の3割に当てはまるといわれるが、松本さんは結婚し長男（1）を身ごもったときは迷い抜いたという。

「生まれてくる子供を愛おしく思えるだろうか。虐待して殺してしまわないだろうか...。誰にも言えない不安が心をさいなみ続けた」

結局、わが子を虐待することはなかった。保育所へ迎えに行くと息子ははち切れんばかりの笑顔で胸に飛び込んでくる。自分も全身で受け止める。

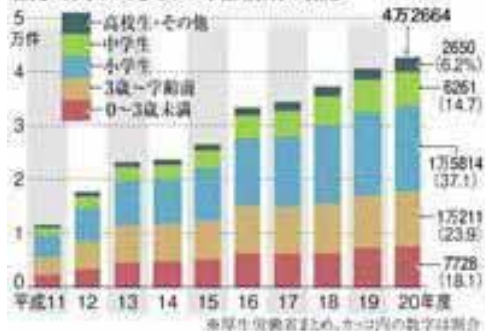
なぜ連鎖を止められたのか。学生時代の恋人が掛けてくれた言葉が支えになっているからだという。

《あなたは、お母さんとは違う。あなたは、あなただよ》

松本さんは言う。

「虐待は子供の心に取り返しのつかない傷を作る。親の愛情を最も求める時期に虐待が長い間続くことが、どんなに子供の成長を妨げるか。自分と同じような子供を作りたくない。私だけで終わりにしたい」

虐待を受けた子供の年齢構成の推移



（3）ネグレクトからの救出 回復の鍵は「愛着」

38年前の昭和47年、中部地方の小さな町で6歳女兒と5歳男児の姉弟が実父により、犬小屋同然のトタン小屋で1年半にわたり監禁される事件があった。

救出後、特別な治療教育チームが生まれ、約20年に及ぶ発達支援が行われた。重大なネグレクト（育児放棄）から救出された子供の「その後」の詳細な記録は、世界中で6例しかない。

チームの一員だったお茶の水女子大学の内田伸子教授(64) = 発達心理学 = は「救出時は2人とも身長80センチ、体重8キロほどだった。言葉は一言もしゃべらず、歩行もできず、はうのがやっつ。どう見ても1歳半程度で、発達の遅れは恐ろしいほどだった」と振り返る。

当時の報道などによると、左官だった37歳の父親は酒びたりで、39歳の実母がミシンの内職をしていた。子供7人が毎年生まれ、母親は子育てを投げ出した。姉弟は排泄(はいせつ)のしつけさえできておらず、「畳を汚す」と怒った父親はトタンで囲った屋根のない小屋を建て、むしろを1枚敷き、毛布1枚を与えて閉じ込めた。

食事は小皿に盛られ、1日1、2回。当初は姉弟の下の乳児も一緒だったが、肺炎で死亡した。見かねた住民が町役場へ連絡した。救出時、2人は丸裸で骨と皮だけになり、仮死状態で横たわっていたという。

目覚ましい発達

施設へ保護された2人は、栄養条件が改善され身長や体重がみるみる増えていった。遅れていた知的・言語的な能力を発達させるための訓練を受け、2年遅れで小学校へ入学した。

内田さんは「目覚ましい発達の鍵となったのは、保育士の女性との『愛着』の成立だった」と指摘する。

愛着とは、乳幼児期に母親など1人の養育者と結ばれる強い絆(きずな)のことで、通常、生後12カ月前後で成立する。「人見知り」も同じころピークを迎えるが、これも養育者との愛着の裏返しであり、健全な発達ぶりを示すものだ。

姉と弟のうち、姉は保育士にすくなつき、愛着の成立と同時に言語や社会性などさまざまな面が順調に発達していった。一方の弟は保育士になじめず対人関係の遅れが目立った。保育士を代えると弟は新しい保育士になつき、猛スピードで追いついたという。

人間は変わる

「この姉と弟ほどまでは重度でないものの、似たような子供は今、施設の中にゴッソリいます」

「子どもの虹情報研修センター」の増沢高研修部長(48)はこう話す。

食べ物をかみ砕く体験がなくサバの煮つけを丸のみする女の子。食事がハンバーガーばかりで濃い味つけを好み、調味料をどっさりかける男の子。トイレ以外の場所で平気で排泄し、お尻をふかない子供たち…。ネグレクトの結果、基本的な生活習慣さえ身につけていない子供が目立つという。

増沢さんは「『この家庭環境は何？ この成育状況は何？』という子供は少なくない。だが、愛着は親とだけでなく施設の保育士や里親とも結び直せる。人間は変わる。そのことをこの姉と弟は証明している」。

姉は現在、3児の母。弟はサラリーマンで1児の父という。内田さんは2人のことを講義で伝えている。女子学生は感想をこうつぶった。

異常な環境で育てられたにもかかわらず回復していく様子は見事としか言いようがありません。今、救出後にしっかりと面倒を見てもらえる子はどれほどいるのでしょうか。救出されずに今も虐待されている子、救出されたものの適切な治療を受けられない子のことを考えると胸が痛みます

入所する子供の7割が被虐待児という児童養護施設を訪ねた。

(4) 児童養護施設の夜 怖い夢「ママが来る」

北関東の児童養護施設の夜。夕食後、子供たちは宿題と格闘していた(大坪玲央撮影)(写真:産経新聞)



真っ暗な板張り廊下に幼子の泣き声が響いていた。北関東の田園地帯にある児童養護施設。午後11時、幼稚園児の森田優斗君(5) = 仮名 = は怖い夢を見たのか大声を上げながら廊下へ出てきた。

「大丈夫」。泣き声を耳にして4人部屋から起きてきた中学3年の少女(14)が小さな肩を抱き寄せ、あやした。優斗君は3人部屋へ戻り、やがて静かな寝息が聞こえてきた。

この施設では5歳から18歳までの41人が共同生活を送っている。男性施設長(56)によれば、その7割は親の虐待から保護された子供たちという。

優斗君は継父による心理的虐待を受けた。「お前なんかいない」「なんでウチにいるんだ」…。

心身の発達が遅れがちで、幼い顔つきは年長組には見えない。最近実母から電話があったものの、「もう切っていい?」とそっけなかった。

小学1年の男児(6)も最近まで夜泣きがやまなかった。実母から身体的虐待を受けた経験を持ち、夜、泣きながらこう叫んで職員にしがみついていたという。

「ママが来る!」

「ママに怒られる!」

足りない受け皿

厚生労働省によると、児童養護施設などの施設や里親のもとで暮らす「社会的養護」を受けている子供は平成20年の調査で4万1602人。昭和36年以来47年ぶりに4万人を超えた。

昭和30年代までは戦災孤児や経済的な理由で施設へ来る子供が大半だったが、平成20年の調査では全体の50・9%が「虐待を受けた経験がある」と答えた。

虐待の急増に受け皿が追いつかず、都市部を中心に施設は満員状態になっている。北関東のこの施設も東京都から委託を受け、41人全員が都内の子供だった。

小学6年の石川翔太君(11) = 同 = は実父から身体的虐待を受け、幼稚園の年長組だった5歳のときにこの施設へ来た。今も頭部に無数の傷跡が残る。

足立区から来たといい、「東京、遠いね」とぼつり。家に帰りたいか尋ねると、「帰りたくない。パパが怖いから」と答えた。

「施設は遊びも勉強も楽しいけれど、叩(たた)かれたことは忘れることはできない。たまに思いますが、自分がいらいらしたとき思いますが」

子供同士の虐待も

子供たちがようやく寝静まった午前0時、男性職員(38)が児童の洗濯物を一枚一枚たたんでた。

児童養護施設は慢性的な人手不足だが、国の職員配置基準は昭和54年から31年間変わっていない。職員は「宿直は私1人。夜泣きする子供たちを寝かしつけるころには、空が明るくなっている。虐待による深い傷を負った子供一人一人に適切なケアをするには、あまりに不十分だと思う」。

一方、施設職員が子供を虐待する「施設内虐待」は全国で年間十数件が報告されている。中部地方の県立病院に勤めるベテラン医師によると、中規模の児童養護施設で数年前、子供同士の性的虐待があった。調査したところ、35人ほどの入所児童で被害も加害もなかったのは2人だけだった。

医師は「相関図を作ると男児から男児、男児から女児、女児から女児、女児から男児とすべての組み合わせの加害行為があった」。性的虐待を受けた子供が適切なケアを受けないまま入所してきて、その子供から加害が連鎖したという。

都内の児童養護施設で施設長を務める黒田邦夫さん(57)は「かつて孤児院と呼ばれた児童養護施設は、そもそも虐待の傷を癒やす専門施設ではない。その矛盾が今、さまざまな面で噴き出している」と話す。

(5)慢性トラウマ、脳に影響 性的虐待の8割に解離性障害「今、手を打たねば」

虐待を受けた子供が入院する病棟の「コントロールルーム」。ぬいぐるみなどに向かって怒り、泣くことで感情を表に出し、コントロールする練習をする＝愛知県大府市のあいち小児保健医療総合センター



「この男の子は虐待と解離性障害。こちらの男の子はADHD（注意欠陥多動性障害）と虐待。この女の子は性的虐待...」。愛知県大府（おおぶ）市にある県立子供病院「あいち小児保健医療総合センター」。心療科部長の杉山登志郎医師（59）＝児童青年精神医

学＝は心療科病棟に並んだ名札を見ながら、ショッキングな言葉を淡々と並べていった。

センターには、わが国にほとんどない児童虐待専門の「子育て支援外来」がある。平成13年の開院以来、1千人を超える子供が受診した。心療科に入院する子供の7割は虐待を受けた経験を持つ。

以前入院した小学3年の男児は、実父から激しい身体的虐待を受けた。両親の離婚後、男児は母親に「うるせー、ババァー」と大声を上げ、叱（しか）られると包丁を持ち出した。学校でも注意されると教室を飛び出し、前に座っていた子供の背中を鉛筆で刺した。児童相談所の紹介でセンターへ入院、ADHDや解離性障害など複数の発達、精神障害と診断された。

杉山さんは「この子のように、深刻な虐待を受けた子供は複数の診断名がつくことが多い。それは虐待による慢性的なトラウマ（心的外傷）が脳とその発達に影響を与えるからです」。

欧米での研究をまとめた新潟大学の田村立（りゅう）（33）、遠藤太郎（34）両医師らによると、子供のころ虐待を受けた成人の脳は、記憶の中枢である「海馬（かいば）」が健常者に比べ5～18%小さかった。また、記憶と情動に関連する認知をつかさどるといふ「扁桃（へんとう）体」が8～23%小さかったという。

医療的ケア必要

虐待には日常生活の常識をわずかに逸脱した軽度なものから、子供の生命に危険を及ぼす重大なものまで幅がある。すべての虐待が慢性的なトラウマに至るとは限らない。

それでも、杉山さんは「現実には虐待を受けた子供の8割に何らかの医療的ケアが必要だ。現在、虐待の対応は児童相談所や福祉機関が中心で、医療体制は遅れている。専門的に治療する態勢を早急に整える必要がある」と指摘する。

その意味で、杉山さんが懸念するのは性的虐待だという。国の統計では年間4万件の虐待のうち3%にすぎないが、センターでは17%に上っている。さらに、性的虐待で受診した3～18歳の男女158人の84%が解離性障害と診断された。杉山さんは「遠からず性的虐待の問題が噴出するだろう。今、手を打たねば収拾がつかなくなる」と話す。

子供が未来

九州地方の都市で暮らしていた30代後半の女性は中学生のころ、母親の愛人から性的虐待を受け続けた。

「私の人生は終わりで、未来はないと本気で思っていた。何が未来なのかも分からなかった」

街で似た男性とすれ違ったり、似た名前を目にすると気分が悪くなる。新聞によく似た顔写真が出ていて緊張したこともあった。

「過去がばれてしまうのではないかと、いつもびくびくしていた。自分が罪を犯したような意識でいた」

結婚して最初の子供が女の子だったとき、性的虐待に関する本を執拗（しつよう）に取り寄せた。次に男の子が生まれ、絶対に性犯罪者にはいけないと誓った。一方で、子供を授かって「やっと自分の味方ができた」とも思ったという。

「私の場合、死にたくて死にたくてここまで生きてきて、今は子供が生きる目的になっている。子供がいなかったら毎日を生きる意味が分からなかったでしょう。虐待のニュースを見るたびにつらくなります。悲しく、眠れなくなります。何とか子供たちを救えないでしょうか」

「私はサンドバッグ...気絶するほど殴られた」「ささいな言葉が救いに」 読者の反響次々



虐待を受けた子供が入院する病棟の「コントロールルーム」に置かれたクマのぬいぐるみ = 愛知県大府市のあいち小児保健医療総合センター

児童虐待の問題を考える連載の第2部「虐待はどんな傷を残すのか」へ読者からたくさんのメールやファクスをいただいた。全体の6割は「私も虐待を受けた」という自らの被虐待体験をつづったものだった。「自分と重なり胸が締めつけられる」(東京都の40歳主婦)など、心の傷を抱えたまま、誰にも言えず社会で生き続ける人々が少なくない現実を浮き彫りにしている。

実母から虐待を受け続けたという30代女性は《壁に投げつけられ、気絶するほど殴られた。5歳のとき、「自分はサンドバッグなんだ。自分さえ殴られていたらいいんだ」と思い込もうとした》。女性は結婚して1児をもうけたが離婚、現在は人間関係の不全や拒食症などに悩まされながら、介護の仕事で子供を育てているという。

《虐待の連鎖を私の代でできる限り断ち切ることが、日々の課題となっている。心は取り出してみせることができないぶん、被虐待児は苦しんでいます》

2児の母という25歳の主婦は母子家庭で育ち、《家の中で殴られたり、怒鳴られたり、無視されたりしているという事実が、友人や近所の人や先生に知られたら恥ずかしいという思いがあり、周りに相談できなかった》という。

《今の時代だからこそ虐待と騒がれるが、「虐待されているから自分は恥ずかしい人間なんだ」と勘違いして、周りに助けを求められない子供は意外に多いと思う。子供は親に褒められたくて、抱き締めてもらいたくて必死に頑張る。だから「周りに言ったらもっと親に嫌われてしまうかもしれない」と恐怖し、誰にも相談できずにいるのです》

一方、虐待の残す傷が考えられているよりずっと深く長く、人の心をむしばんでいるさまもうかがえた。

43歳の男性は乳幼児期に祖母から虐待を受けたといい、《会社で働いていながら、なぜ自分は他人より劣っているのだろうと強烈な劣等感に悩まされてきた。幼少期の虐待は確実に一生涯、その子供に影響を与えようと思う》。

35歳の女性は《親との関係で悩み、社会に出てからは他人と比較して通常的人格形成ができていないことに悩む。35歳になっても自分の価値が見いだせない》と訴えた。

また、虐待の世代間伝達を止められた女性の「あなたは、あなただよ」という言葉に共感が集まった(第2回「『お母さん!』と絵は叫ぶ」)。33歳の主婦は《当たり前のこと、ささいな言葉が人を救うこともあると改めて感じた。こうした体験をもっと聞きたいと思った》とつづった。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック

